

# 中世村落の景観復原について

—— 東京都日野・八王子地区を中心に ——

原田信男・渋谷芳浩

## 1. はじめに

中世村落史研究においては、かつて村落構造論が盛んで、村落内部の階級構成や荘園制もしくは在地領主制といった支配形態の観点から論じられることが多かった。こうした社会経済史的なアプローチは、中世村落の理論的な解明に大いに役立ったが、一方で中世村落に対する平板的な理解を生み、さまざまな実態を有する村落の具体性を欠落させる結果を招いた。その理由としては、中世文書のみを史料として用いた場合、文書が残存する条件に規定されて、村落支配に関係する部分しか検討することが出来ず、多様な性格を持つ村落の細部を見通すことは甚だ困難であった、という事情を挙げることが出来る。

確かに、中世村落の理論的把握は、村落を取り巻く政治的状況や経済的条件の解明に、非常に重要なウエイトを占め、ひいては中世社会の位置付けや歴史の発展段階の究明に大きく寄与するところとなった。しかし無数といってよいほど存在した中世村落は、それぞれに具体性を有し、政治的あるいは経済的な条件に加えて、厳しい自然条件との闘いの中で、自らの生活基盤を築き上げて来たのである。むしろ村落の形成は、そのほとんどが地形や気候条件との関連で選地され、そこに営まれた生活の上に政治的・経済的条件が作用し、それらの社会的な総体として、さらに新たな政治・経済状況が生み出されるのだ、と考えるべきだろう。

こうして見ると、中世村落史研究において、個々の村落の具体性を追及するという作業は、極めて基本的な位置を占めることになるはずであるが、残念ながら従来の研究史は、長い間これを軽視してきた。なかでも村落景観の研究は、中世村落の具体性を最も端的に物語るもので、人々の生活の場となる村落の環境がどのようなものであるのかは、村落史を考える上で最も基本的な枠組みとなるはずである。これまで、どちらかという中世村落を机上で論ずることの多かった傾向を否認しないが、村落は具体的な自然条件の中で存在し続けたのであり、フィールドを丹念に精査する必要があるだろう。中世村落を構成する要素は、歴史的な重畳性を考慮すれば、現在の地形からも読み取ることが可能であり、中世文書にのみとらわれなくても、中世村落の景観復原は行い得るのだ、といえよう。

こうした試みの成果として、木村礎編『村落景観の史的研究』があり、原田もその中世部分を担当したが、<sup>(1)</sup> この共同研究は茨城県西部一帯を対象としたものであった。ただ原田担当部分については、狭い地域に限定した場合には中世村落の検討に不都合が生じるという認識があったため、関東平野東部一帯にフィールドを広げたという経緯がある。このため関東平野西部においても、同様な検証作業を試みるべき必要性があると考えた。また、この共同研究は、文献調査を主体とした上で現地状況を重視することに力点をおいたが、村落景観の研究に有力なもう一つの学問方法である考古学との協業には至っていない。

このため精度の観点からすれば、特に中世部分においては若干の問題を残すところとなった。そこで関東平野西部において、考古学的な調査が進展している地域で、同様の方法を試みる必要があると考え、地形的な条件も考慮した上で、東京都日野・八王子地区を調査対象地として設定するに至った。小稿では、まず中世村落の景観復原に関する基本的な問題を歴史学と考古学の双

方から扱い、次いで中世村落の範囲に深く関係すると考えられる区画溝の問題を論じた上で、八王子市の館町遺跡に隣接する龍見寺裏山における試掘調査の報告を行いたいと思う。

## 2. 歴史的な中世村落の景観復原について

歴史学の分野において景観の問題が注目されるようになったのは、1960年代のことで、62年に永原慶二は、薩摩国入来院を分析対象として、「中世村落の構造と領主制」を発表し、中世村落の具体的な復原を試みた。<sup>(2)</sup> こうした方向性をトータルな形で纏め上げたのが、古島敏雄の『土地に刻まれた歴史』で、<sup>(3)</sup> その関東における具体化を推し進めたのが常陸国真壁郡に素材を求めた小山靖憲の仕事であった。<sup>(4)</sup> さらに1970年代に入ると、『月刊歴史』に連載されていた「ワタリ歩く荘園」の現地主義の方針を採用して、稲垣泰彦編『荘園の世界』が刊行され、荘園の具体像を描くことに力点が置かれた。<sup>(5)</sup> これらの基本視角は、現地調査を基礎とした史料の分析にあったが、中世村落の現場を重視した点に先駆的な意味がある。

一方、地理学ではドイツ地理学の影響のもとに、古くから集落地理学や歴史地理学が景観を問題としていたが、69年には歴史学の成果を踏まえた藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む』が刊行され、<sup>(6)</sup> 改めて地形と村落との関係が意識されるようになった。さらに最近では、藤岡の影響を受けた金田章裕の『微地形と中世村落』といった仕事も纏められている。<sup>(7)</sup> また民俗学は、80年代に入って景観論への関心を高め、福田アジオが村落の空間構造に言及したほか、<sup>(8)</sup> 香月洋一郎が『景観のなかのくらし』で、景観を主とした観察調査を行い、民俗学への適応を試みている。<sup>(9)</sup>

こうした状況のなかで、80年代には中世史研究においても、村落景観が絵画史料との関連で議論されるようになり、小山靖憲「荘園絵図研究の成果と課題」を初め、<sup>(10)</sup> 竹本豊重「中世村落景観復原方法について」<sup>(11)</sup> や、海老沢衷などによる『豊後国田染荘の調査』<sup>(12)</sup> といった成果を生むに至った。なお先の木村礎編『村落景観の史的研究』の刊行は88年であるが、その中間報告にあたる『駿台史学』の村落景観特集号の発刊は81年のことであった。<sup>(13)</sup> さらに近年では、高島緑雄の「建武元年正統庵領鶴見寺尾郷図の研究」<sup>(14)</sup> が出て、文献史料の残らない地域で絵図のみを用い、現地景観との関連から中世村落を追及するという試みもなされている。また歴史学研究会大会でも、1990年に原田信男「中世における村落の景観と生活」、<sup>(15)</sup> 翌91年には海老沢衷「中世における荘園景観と名体制」<sup>(16)</sup> といった中世史部会の景観に関する研究報告が続いた。

このように、この数年間に村落景観に対する関心が急激に高まり、特に中世村落史研究においてその傾向が顕著であるが、これに最も強力な学問的方法を持った考古学が加わって、一層議論が活発化しつつある。この考古学による中世村落の景観復原については、次章以降に譲ることとして、ここでは歴史的な景観復原に関する基本的な問題を指摘しておくに留めたい。

歴史学の基本は文献史料にあり、文字史料の解読から歴史上の事実を確定していくことに、その使命がある。しかし残される文字史料は、人々の生活の全てを物語るものではなく、前述のように村落支配との関係で書き留められたものに過ぎない。しかも中世史料となれば絶対的に少なく、ましてや中世前期の村落側に史料が残される例は稀である。もちろん中世も後期になれば、荘園村落などの場合で、検注帳をはじめとする土地台帳が残されることもあるが、中世村落の地名そのものすら書き留められないことの方が圧倒的に多い。確かに文書主義的厳格さからすれば、文献史料の残る中世村落を研究対象とすべきことになる。

しかし、地形などの自然条件の多様性を考えた場合、文献史料を有する村落が、景観論という立場から分析対象として適合的であるか否かは、極めて偶然的な問題となり、景観という分析基軸を設定することは不可能と化してしまう。それゆえ景観論の立場からは、中世文書の有無に調査地の設定が左右されてはならない、という問題が生ずる。もちろんこのことは、文献史料の軽視を意味しない。何らかの形で中世村落の痕跡が確認され、中世文書の代りに近世文書があれば、

これを活用することは可能であるし、特に近世初期の検地帳類があれば、かなり有効な手段となりうる。また板碑をはじめとする金石文なども、推測に有力な根拠を与えることになるし、現地の古老の記憶も復原を助けることもあるが、これに関しては他に傍証を得べきであり、十分な検討が必要であろう。ただし小地名や水懸りについては、聞き取りがそのまま参考になる場合もあり、口碑の扱いには難しい部分が多い。なお近世の村絵図も、中世の村落景観を論ずるのに極めて有効であるが、ない場合でも、明治期の迅速図や現在の一万分の1以上の縮尺の大きい地形図なども、水田や畠地の区分、水路の有無、旧河道の存在、湖沼や湿地の状況、などを知るのに役立つ。

ただし、こうした史資料は、あくまでも補助的なものであって、実際にはこれらを参考として現地を詳細に見て歩くことが最も大切な作業となる。中世村落の景観復原においては、何よりも耕地と集落の確認が重要で、これに神社や寺院さらには墓地などの宗教施設、共同の入会地や用水源、といった村落生活に不可欠の要素を押さえることで、逆に中世村落の輪郭が浮び上がってくる場合もある。もちろん荘園絵図など中世の絵画史料が存在すれば別であろうが、そうした例は一般には稀であり、これが文献と対になる事例を探すことは不可能である。しかし村落景観が歴史的な重畳性の上に形成されたものであるなら、後代に付加された要素を、能うる限りの資料と方法を用いて、少しずつ丁寧に削ぎ落として行けば、村落景観の時代性を読みとることは可能であろう。いずれにしても歴史学的な中世村落の景観復原は、考古学ほどの確実性を持ち得ず、推測の域をでないという限界はあるが、ある程度の精度で有効性を持つものと思われる。むしろ、そうした弱点を克服するためには、考古学との積極的な協業が今後ますます必要となるであろう。

(1～2：原田信男)

### 3. 考古学的な中世村落の景観復原について

1980年代の考古学は、中世に関する調査・研究を著しく進展させたのであり、現在この分野は「中世考古学」などと呼ばれ考古学研究の一部門として定着するに至っている。とりわけ都市や城館をめぐる研究や陶磁器をはじめとするモノの流通の研究では考古学の側からの積極的な発言もめだち、文書記録のある時代であっても考古学的手法が一定の有効性を発揮して、文献史学その他の隣接諸学問とともに中世史研究の一翼をになえる可能性を示しつつある。ところで村落史研究においても、出遅れた観はあるが考古学的な試みははじまっている。

少ないながら成果も出されはじめており、畿内近国地域での研究が進んでいる。<sup>(17)</sup> 畿内では、古代村落からの転換が10世紀に求められ、以後、立地をかえて10～12世紀を通じた中世村落の形成が認められている。その後の展開は13～14世紀については知られるが、14世紀以降に集村化が進むようである現在の集落と重なってしまうことから、15世紀以降の状況は不分明であるという。集落を構成する建物等の類型化によって階層性にまで言及できるようになっており、考古学的な村落史研究は確実にその可能性を広げている。ただし村落史研究を指向しながらも集落論にとどまっている点は惜まれるので、村落論を集落論で置き換えてきた考古学の伝統的な考え方をそろそろ改める時期にきているだろう。<sup>(18)</sup>

一方、東国では、いまだに成果と呼べるものがないが、そんななかでいわゆる中世方形館をめぐる研究だけは先行している。<sup>(19)</sup> これはしかし、若干の研究蓄積のある居館・城館研究の流れのなかに位置づけられるのであって、村落史研究とどうかかわっていくかが今後の大きな課題である。とはいえ、村落の中核たるべき居館跡の発見例さえ十分な数ではなく、各地でその存在を明らかにしていくことも村落史研究の目標のひとつである。現時点では、東国においては、12世紀を通じて中世村落が姿を整えてくることがおぼろげながら明らかになってきており、7世紀頃に掘立住居に変化する畿内とは異なり、東国では、この時期に住居が竪穴から掘立形式に転換することや、集落立地も大きく変化し沖積微高地へ進出するといった状況も少しずつわかってきた。<sup>(20)</sup> 原

始・古代以来の村落景観とはずいぶんと異なるはずで、この時期の変化は東国史全体のなかでも大きな意味を持つものと思われる。13世紀以降の村落の全体像は残念ながらまだ不明瞭で、15世紀以降となると、これは畿内同様に集落痕跡さえ検出例に乏しく、今後に期待するほかはない。東国を対象とする場合、中世村落の痕跡が埋蔵文化財として十分に認知されていない、という行政的な対応の遅れや調査者の認識不足がなお障害として残っており、資料の増加はこうした障害の克服にかかっている。

以上のように、じつはまだまだこれからといった段階にある考古学的中世村落史研究なので、指向すべき研究の方向性も不明確なのではあるが、私見では、なによりもまず、さまざまな遺構の存在を明らかにして村落景観の復原研究に向かうべきことが必須と考える。遺構の発見はそれがそのまま村落景観要素の一部を検出したことになるという考古資料の特性は景観復原に適しており、得意とするところである。個々の遺構に関する個別研究の深化はもとより必要なことであるけれども、そのみでは断片的な中世村落像しか描けないのではあるまいか。幸い、既存の村落史研究には景観を重視し、実体に即して研究を行おうとする立場があることからすれば、考古学は、景観論的研究を通じて中世村落史研究の多様な方法や視点・論点を学ぶことができるのである。そうすることによって考古学は包括的な村落研究の視野を得られるし、また考古学独自の研究領域、得意な分野を見きわめられるようになるであろう。そうした諸々の前提となるのが村落の景観復原という作業である。<sup>(21)</sup>

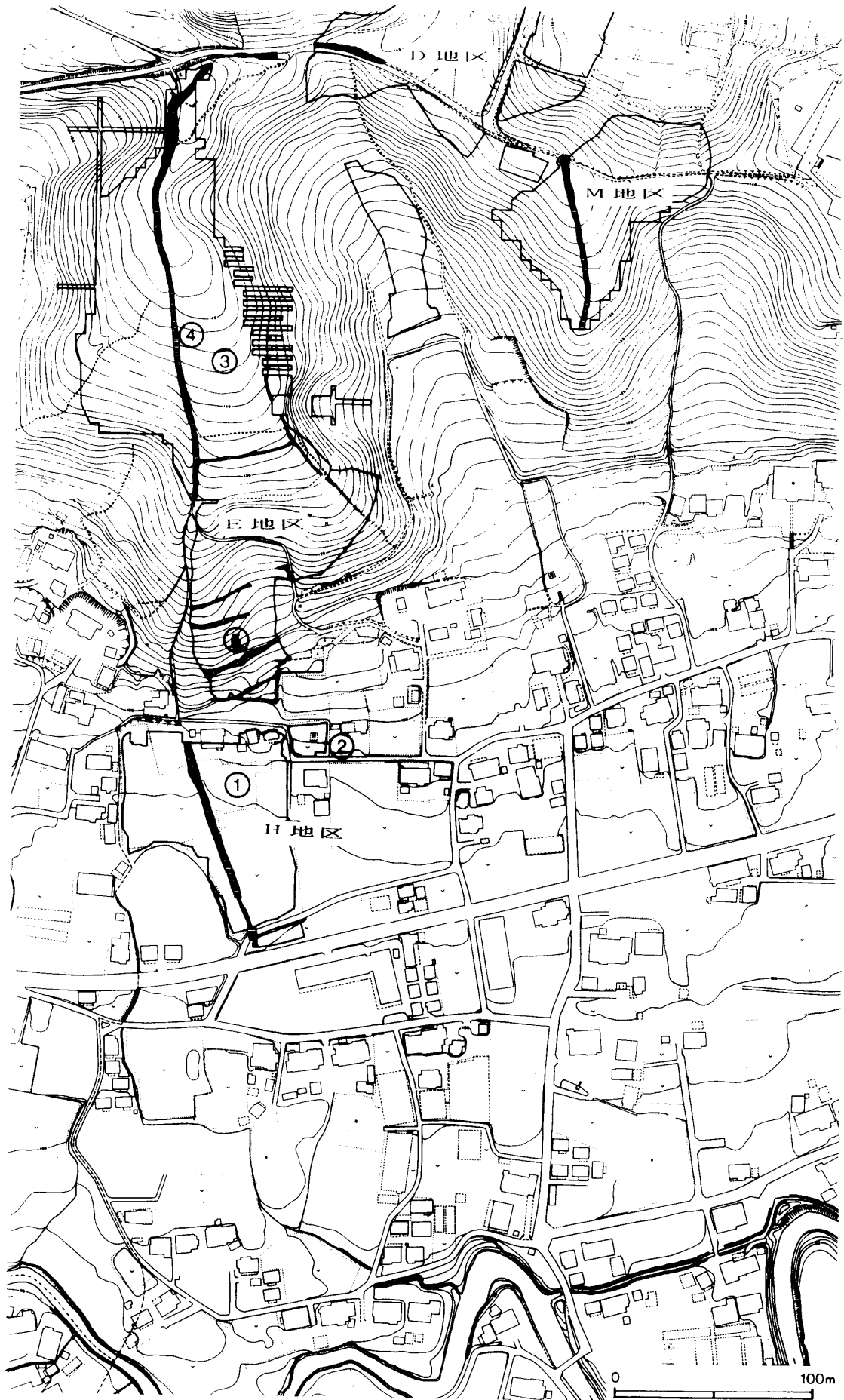
とはいうものの具体的な作業となるとやはり困難なことである。かりに村落を「集落+耕地+ $\alpha$ 」と規定してみるならば、<sup>(22)</sup> 中世村落関連の考古資料は「 $\alpha$ 」に相当するものが多いという点に特色がある。たとえばそれは墳墓であり経塚であり、地下式横穴・火葬址・堀・溝などであり、多量の銭を埋納した場所といったものもある。プラス $\alpha$ といった概括では整理しきれない多様さをもっており、考古学的には集落や耕地と等価値な、軽視できない内容である。ところで村落という視点で見ると、東国では、これらがきわめて広域に、点在して発見され、しかも個々の遺構の検出地点がことごとく別の「遺跡」として登録されている場合がまれではないという問題がある。つまり、これらを試しに地図上にプロットしてみたところで、集落や耕地とともに、ひとまとまりの村落跡と認識することは非常にむずかしいと言わねばならない。ここに、はじめに村ありきの文献史的な方法との差異が現われており、個別遺構の存在から組みあげるしかない考古学的な景観復原の困難さが認められよう。

しかしながら中世文書が伝存しておらずとも中世村落を発見できるという考古学の強みもある。文献史料の欠を補って各地で中世村落の痕跡を発見し、復原される景観を記録にとどめておかねばなるまい。要するに、個々に孤立して検出される景観の要素の相互の関係が空間的に明らかになればよいので、その際の手がかりが必要なわけである。それはプラス $\alpha$ の遺構のうち、堀や溝などに期待される。

#### 4. 中世村落における区画溝の意義

堀や溝は、村落や屋敷の四至表示の目標物として譲状などにときおり記載されている。また絵図に記載されることもあって、たとえばかつて高島緑雄が検討した『建武元年正統庵領鶴見寺尾郷図』中には、「本塚堀」と注記された朱線が寺領の周囲に引かれている。主として丘陵縁辺をめぐる位置に設定されたと思われる「本塚堀」の長さは、現地比定図によれば延長10kmをはるかに越えている。<sup>(23)</sup>「本塚堀」が実在したかどうか興味をひくところだが、東国村落関係の考古資料をみるかぎりではまったく架空のものでもなさそうである。

じつは中世の遺構としての堀や溝の検出は数多いのである。古代以降さまざまな堀や溝が掘削されたが、近世以降の城郭に伴う堀を別とすれば、規模の点では弥生時代の集落を囲む環濠とな



第1図 宇津木台地区の区画例

らんで中世の堀や溝はめだつ存在であり、考古学的には中世を「堀の時代」あるいは「溝の時代」と呼んでさしつかえないほどだと筆者は感じている。実際、群馬県の女堀遺構<sup>(24)</sup>や栃木県の自治医科大学周辺地区で発見された下古館遺跡の長大な1号堀などをみるにつけ、<sup>(25)</sup> その印象を強くする。一般的な村落遺跡においてもやや規模は小さいにしても断片的ながら堀や溝の検出は多い。ただ断片的なだけに、そして遺物の出土がきわめて少ないために、調査者の注意をひくことはあまりなかった。しかし以下のような事例がある以上、やはり堀や溝を重視すべきなのである。

第1図は、東京都八王子市の北東部に所在する八王子市石川町の西端にあたる地区の地形図であり、北側に丘陵、南端には蛇行する河川、その間は河川沿いの段丘といった地勢が表わされている。河川の名は谷地川（やじがわ）という。北側の丘陵地に住宅団地の造成が計画されたため、1981年から86年にかけて、宇津木台遺跡群と総称された埋蔵文化財包蔵地の事前発掘調査が実施された。<sup>(26)</sup> 第1図には、宇津木台地区の14カ所の発掘区のうち、D・E・H・Mの各地区が図示されている。

これら各地区においては一連の中世の溝が発見された。丘陵上のD・E・M地区ではおおむね尾根筋を通るように検出され、E地区の南の段丘平坦面に位置するH地区では同様の形状の溝がほぼ南北にまっすぐ通過している。H地区からさらに南へ伸びているのは確実であるし、M地区からも尾根を下って平坦地へと連続している可能性は高いので、もしかすると溝の両端は南方の谷地川の近辺にまで到達するかもしれない。かりにそうだとすると、調査した部分だけでも550 mあるから、推定の総延長は1,000～1,500 mにも及ぶことになる。深さ1 m、上面幅2.5～3.5 mとさほどの規模ではないが、しかし尾根・平地を問わず連続して1 km以上も掘削するとなると容易なことではない。

それはさておき、この溝の全貌は開発区域の関係で明らかにできなかったものの、第1図から、ある領域を区画していることがおよそ理解できる。つまり中世村落には、このように溝で区画された領域が存在するのである。

これがいかなる性格の領域なのかについては、内部の調査が行われていない現時点ではコメントできないが、とりあえず参考までに領域内部で検出された中世の遺構や遺物を挙げてみる。それらは図中の数字の位置に検出されている。①は小規模な掘立柱建物址、②は火葬址群、③はいわゆる配石墓、④は経筒外容器の破片の集中地点、⑤は区画溝に直交し段切りをともなう数条の溝、といったものである。これだけでは何とも言いがたいけれども、ここで留意しておきたいのは、通常ならばこれらがそれぞれ孤立的に発見されたとしても相互の位置関係など問題にしないが、区画溝を媒介にすることによって領域内の景観の一部としての位置づけが可能になったという点である。考古資料に即してみれば、区画溝がこうした広域の景観復原の際に有力な手がかりになりうるといった点がすこしは理解されると思う。

以上のような区画溝および区画される領域の発見例はまだ少ない。筆者が東京西部多摩地区を中心とする事例を探索、紹介した前稿<sup>(27)</sup>の時点では、上述の宇津木台地区の例を含めてわずか4例、その後は良好な事例を1例追加しているのみである。けれども前述のように、断片的なものであれば堀や溝の調査事例はじつに多いのであって、そのなかには相当な数の区画溝が含まれているように思う。ちなみに、これらの溝からはごく少ないが13～15世紀の遺物出土する例が認められ、それらの出土状況から15世紀以降の埋没を示唆される場合が多いので、おそらく区画溝の検討は13～14世紀の村落景観の検討につながることになる。

区画溝の発見は同時に区画される領域の存在をも示しているのであり、そしてそれは村落景観復原の端緒となりうる。溝は、概念上の村落のなかではプラスαにすぎないかもしれないが、考古学的には集落と並ぶ重要な要素である。明確な問題意識をもった堀や溝の調査が必要である。

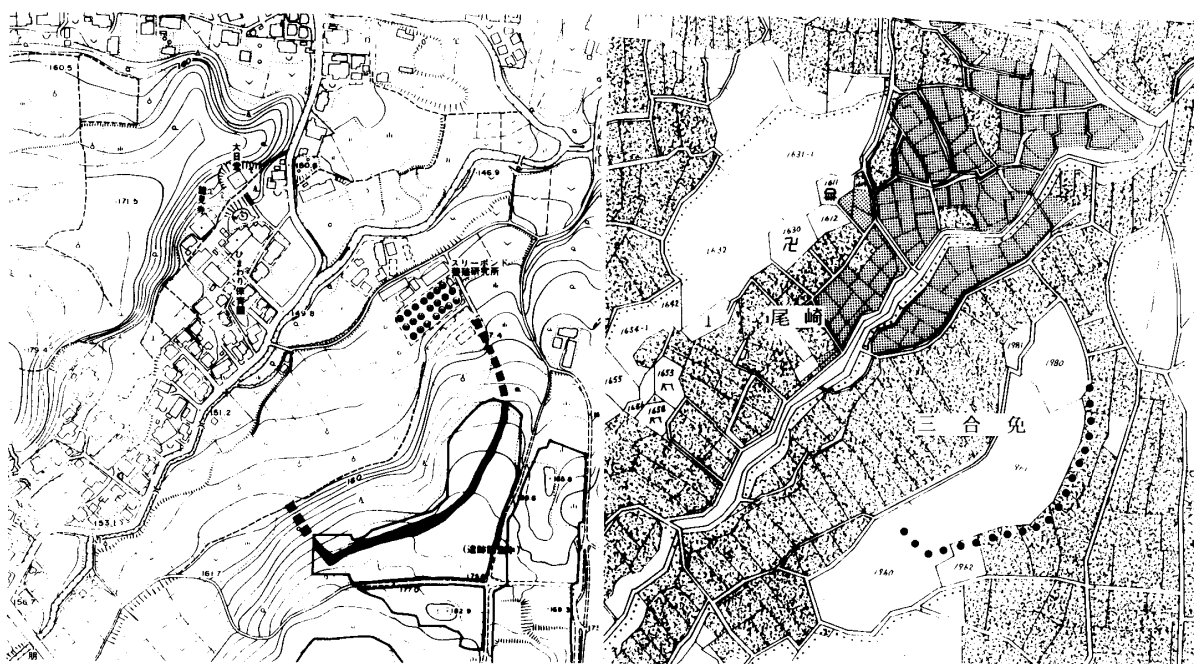
## 5. 八王子市館町龍見寺裏山での試掘調査

中世区画溝は、発掘調査のスケールで言えばかなりの広域に展開しており、その全容を明らかにする機会は今後もそれほど多くないと思われる。まして昨今の発掘調査の大半が開発に伴う事前調査であってみれば調査の範囲は開発の規模に左右されるので、意図して区画溝の全体を調査しようとする自体が不可能である。けれども中世区画溝が基本的には連続して掘削されているという事実からすれば、他に方法がないわけではない。

区画溝の一部を発掘区内にとらえた場合、丘陵地の山林などでは地形の微妙な起伏を頼りに発掘区の外でも溝の延長が推測できることがある。また、溝の埋没後に山道として利用される例もあり、そのことによって後世の土地区画が間接的に区画溝の位置に規定される場合もある。したがって地籍図などを参照すれば発掘区外の区画溝の続く先をある程度は推定できる。前述の宇津木台の区画例では西側の溝が旧大字塚とみごとに重なっていたし、それ以外の部分でも現況の畑地境などによく一致した。このような状況から溝の埋没位置推定が可能ならば、推定位置のところで試掘調査を実施し、推定の当否を確かめればよい。たとえ区画溝の全体は調査できなくとも、この方法ならば区画のあり方を確実に把握することができる。ただし、開発に伴う事前調査でもないかぎり、労力・調査費用とも自弁である。

最近、著者らはそうした自弁の試掘調査を行なったので、以下に若干の経過と調査結果を記してみる。

対象となった区画溝は、宇津木台の例と同じ東京都八王子市にある。これも前稿で紹介したもので、八王子市南西部の館町(たてまち)に所在の「館町遺跡第1地点」で発見された1号大溝である。<sup>(28)</sup> 断面がV字形を呈し、上面幅4～5m、深さ2mというから、宇津木台の溝に比べるとかなり規模が大きい。第2図左の地形図(縮尺1:7000)中に示したとおり、このような溝を220mにわたって検出した。溝の両端は発掘区の外へとなおも続くようで延長方向を図のように推定してみると、北西側に位置する殿入川沿いの主として低位段丘面を囲い込むことになる。しかし、囲まれる領域の面積はさきの宇津木台の事例と比較して約 $\frac{1}{3}$ と著しく狭く、かつ、南側に丘陵を背負うといった一般的には不利と思われる立地条件が不可解に思えた。なお、低位丘段面は開発区域外で現在も畑地であり、発掘調査はまったく及んでいないので、内部がどのような領域なの



第2図 館町の区画例(左)と地籍図上の位置(右)

かについては手がかりがない。

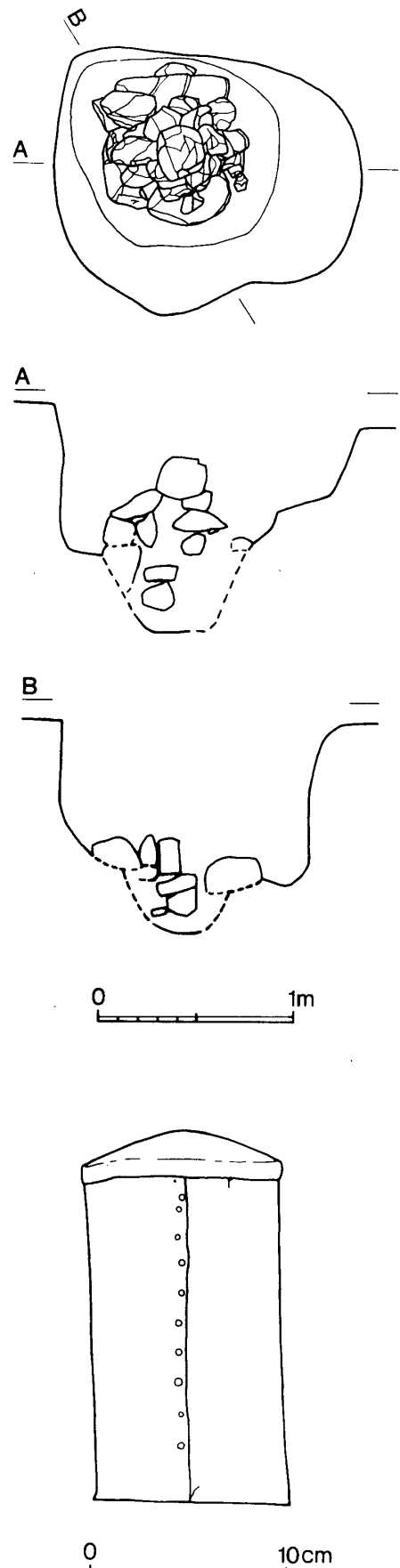
地籍図を参照したところ、第2図右のように、大溝は小字「三合免」の館町1961番地の外周区画に沿っていることがわかった。ところでこの付近は小河川ながら殿入川とその本流湯殿川との合流点に近く、館町のなかでは水田がまとまっている地区であった。このことは地籍図からもよく読み取れる。そして「三合免」の対岸、小字「尾崎」には曹洞宗龍見寺があり、そこには亀池と呼ばれる湧水地（1612番地）も所在する。また、龍見寺は戦国末期の創建と伝えるが境内には大日堂（1611番地）があって、藤原末期の作といわれる大日如来が納められている。<sup>(29)</sup> つまり「三合免」と「尾崎」を合体させてみると、中世村落の立地条件として申し分のない景観が得られるように思うのである。そのつもりで地籍図をみると、「三合免」の大溝の位置と龍見寺裏山にあたる館町1631・1632番地の外周区画とが、川をはさんでみごとな対称性をみせることに気づく。そうすると区画溝は川の両岸に展開し、龍見寺の外周にもめぐっているのではないかと、そうであれば「三合免」側の領域面積が小さいことも説明がつくのではないかと。そうしたことが龍見寺裏山における今回の試掘調査を計画する発端であった。

試掘調査は、龍見寺ほか土地所有者の方々のご了解を得たのち、文化庁宛発掘届を提出し、1993年2月15日から22日にかけて実施した。

調査目的は、龍見寺裏山の寺域外周に沿う位置で大溝の有無を確認するというものである。大溝を探すのが目的であるから、大溝の推定位置、すなわち地境に直交してトレンチを設ける方法をとった。事前に地境の付近をボーリングステッキによって調査し、溝の確認できそうな場所を選んで順次トレンチを設定することにした。調査期間中に幅1mのトレンチを6カ所に設け、その延長はのべ45mに達した。

しかしながら調査の結果、龍見寺の外周には大溝は掘削されていないことがほぼ明らかとなった。じつは溝があるにはあったのだが、これは隣地の畑地を画する小規模な根切り溝であった。その結果、地籍図をもとにして考えた上記の推測はとりあえず否定されることになり、残念ながら「館町遺跡第1地点」発見の区画大溝に関する追究は振り出しに戻るにいたった。

その代わりというのではないが、1基のいわゆる経塚を発見した。溝を探すためのボーリングステッキによる調査の過程で見いだしたもので、トレンチ調査と並行してこの経塚の調査も行なった。第3図に示した



第3図 経塚・経筒実測図



ように、長径 150 cm、深さ 100 cm ほどの穴のなかに大きな礫を円錐形に積み上げた遺構で、礫を上から順次取り除いていくと石室ふうに組まれた石組の底面に置かれた経筒が現われた。外容器はなく直接埋納したものである。経筒は銅板を折り曲げて鋳留した銅板造りで、蓋を含む高さが 19.5 cm、胴部の径は土圧でやや歪んでいるが約 10 cm となっている。納められた經典が残存しているかどうか期待されたが、内面に紙本経の残片とみられる紙が付着しているのみで中身は消滅しており、少量の土が侵入していた。また筒本体にも刻書・墨書の類は認められなかった。

紀年銘がないため埋経がなされた時期は明確にならないが、経筒の様相から古代のものではなく 13 世紀以降というご教示もあり、中世の埋経遺構であることは確実である。経筒については現在類例の収集等検討を進めており、埋経の時期に関してももう少し限定できると思われる。なお、経筒の発見を龍見寺側に伝えたところ、龍見寺では出土地点は不明確ながら、破損したほぼ同様の経筒 2 個をすでに所蔵していたことが判明した。これらも裏山など龍見寺境内から出土したとすると、他にもまだいくつかの埋経遺構が存在する可能性は高い。経塚が宗教施設その他の近辺という特定の場所に発見される例が多いことを考えれば、これは意外な展開なので、大溝による区画領域の対岸には、次には埋経がなされるような条件を備えた景観を復原しなければならなくなったのである。

## 6. おわりに

龍見寺裏山での試掘は、大溝ではなく経塚の発見という予想外の結末となった。調査の所期の目的からすれば試掘は失敗ということになる。けれども大溝の発見に端を発した地籍図上での景観的推測が試掘調査の計画を生み、これが経塚という新たな景観構成要素の発見につながったことは間違いないのである。区画溝や区画内部の追究は、今後「三合免」地区においての試掘を積み重ねることでやり直せばよいだろう。

今回のような調査は、館町のように中世文書の残っていない地域ではもちろん必要であるが、むしろ中世のさまざまな状況が知られている地域でもっと試みられてよいだろう。実際、館町に中世文書など伝わっていれば、試掘調査の目的や方法もまた異なってより有効かつ生産的に実施できたはずであるし、区画溝や経塚の意義や位置づけもいっそう明確になったに違いないのである。たとえば文献史料や絵図類その他によってある地域の過去の村落景観が推定復原されている場合、考古学的手法は、その推定により高い精度を与えることが可能な一方で、批判的に検証する役割も果たすことができる。そのような場においてこそ考古学的手法はさらに有効性を発揮するに相違ない。

このことは考古学的手法の従属性を意味するのではない。景観復原にあたって何が主で何が従になるかは、その地域で利用できる史資料の性格に規定される事柄であり、本来的に復原作業はいろいろな手法の複合によって実現される。その一端を確実にになっていくために、後発の考古学はさまざまな経験を積んで自らの手法を鍛えておくべきと考えられる。(3～6：渋江芳浩)

## — 注

- (1) 原田信男「中世の村落景観」(木村礎編『村落景観の史的研究』八木書店, 1988) 所収。なお木村の『村落景観の史的研究』の前提をなす共同研究として, 木村礎・高島緑雄編『耕地と集落の歴史』文雅堂銀行社, 1969年がある。
- (2) 永原慶二「中世村落の構造と領主制」(同共編『中世の社会と経済』東京大学出版会, 1962) 所収。
- (3) 古島敏雄『土地に刻まれた歴史』岩波新書, 1967。
- (4) 小山靖憲「鎌倉時代の東国農村と在地領主制」(『日本史研究』99, 1968) 所収。
- (5) 稲垣泰彦編『荘園の世界』東京大学出版会, 1973。
- (6) 藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む』第1集 大明堂, 1969。以下73年まで毎年続編が出され, 第5集で完結した。
- (7) 金田章裕『微地形と中世村落』吉川弘文館, 1993。
- (8) 福田アジオ『日本村落の民俗的構造』弘文堂, 1982。
- (9) 香月洋一郎『景観のなかのくらし』未来社, 1983。
- (10) 小山靖憲「荘園絵図研究の成果と課題」(『日本史研究』244, 1982) 所収。
- (11) 竹本豊重「中世村落景観復原方法について」(『岡山県史研究』7, 1982) 所収。
- (12) 『豊後国田染荘の調査』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館, 1986。
- (13) 『駿台史学』56, 1981。
- (14) 高島緑雄「建武元年正統庵領鶴見寺尾郷図の研究」(『明治大学人文科学研究紀要』25, 1985)。
- (15) 原田信男「中世における村落の景観と生活」(『歴史学研究』613, 1990) 所収。
- (16) 海老沢衷「中世における荘園景観と名体制」(『歴史学研究』626, 1991) 所収。
- (17) 代表的な研究は, 広瀬和雄「中世への胎動」(『岩波講座 日本考古学 6 変化と画期』岩波書店, 1986), 同「中世村落の形成と展開」(『物質文化』50, 1988) など。なお, 後者の注(1)に畿内関係の他の論文が列挙されている。
- (18) 雄山閣刊『日本村落史講座』において, 岩崎卓也, 大塚初重, 熊野正也らが, そうした反省点に触れている。
- (19) 橋口定志「中世居館の再検討」(『東京考古』5, 1987), 同「中世方形館を巡る諸問題」(『歴史評論』454, 1988), 同「中世東国の居館とその周辺」(『日本史研究』330, 1990), 同「方形館はいかに成立するか」(『争点 日本の歴史 4 中世編』新人物往来社, 1991)。
- (20) たとえば森達也「多摩川中流域の低地の開発と中世村落」(『あるく中世』No. 2, 1992)。
- (21) なお, 考古学的な景観復原に関しては, すでに梶原勝「考古学と村落史研究雑感」(『あるく中世』No. 2, 1992) で, 簡潔に意見が述べられている。
- (22) 周知のように, 木村礎の村落概念である(同『日本村落史』弘文堂, 1978, および前掲注(1)の同編著)。
- (23) 前掲注(14)の論文。
- (24) 能登健・峰岸純夫『よみがえる中世 5 浅間火山灰と中世の東国』平凡社, 1989。
- (25) 年度ごとの調査概報(栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区』)が刊行されている。
- (26) 『宇津木台遺跡群 XII』八王子市宇津木台地区遺跡調査会, 1988。
- (27) 渋江芳浩「中世区画溝に関する覚書」(『東京考古』10, 1992)。
- (28) 『館町遺跡 III』八王子市館町遺跡調査団, 1987。
- (29) 龍見寺は天正年間の創建で, 大日堂は永禄年間に他所より移転してきた, と伝えられる(『八王子市史』下巻)。

\* なお本研究は文部省科学研究費補助金(平成4年度; 課題番号 04801040)による研究成果の一部である。

---

 << 執筆者 >>

原田信男(はらだ・のぶを): 本学教授

渋江芳浩(しぶえ・よしひろ): 東京都日野市・落川区画整理地区遺跡調査会